

## 生物化学テロの危機管理にいかに関与するか

瀬戸 康雄

**How Do We Contribute to Crisis Management in Biological and Chemical Warfare Terrorism**

Yasuo SETO

*National Research Institute of Police Science, 6-3-1 Kashiwanoha, Kashiwa City 277-0882, Japan*

(Received August 10, 2006)

1995年東京地下鉄の5車両内にサリンが撒かれ、12名の方々が亡くなられ、5000名以上の負傷者が出る一大事件となり、世界を震撼させた。また、2001年の9月11日には米国主要都市の施設に旅客機が自爆的に突入して、数千名以上の死亡者を出す9.11米国同時多発テロが発生したが、その直後米国東海岸の議会やマスコミに炭疽菌芽胞入りの郵便物が送付され、芽胞を吸入した5名が死亡、17名が負傷した。昨今爆発物自爆テロ事件は頻発し、これら危険物を用いたテロリズムの脅威は顕在化している。わが国では、1998年の和歌山毒カレー事件において、現場対応での地方対処機関の連携の不十分さが指摘され、内閣府を中心として、国レベル、地方行政レベルでの危機管理体制の強化が進められている。特に、9.11事件以降は、テロリズムに対する国家的な取り組みが強く求められてきたところである。テロが発生する前の事前対応としては、未然防止を目的として、法的処置、テロリスト情報入手、国際テロ対処協力、緊急現場体制の構築、関係機関の協力体制確認、解毒剤・ワクチン・抗生剤等の医薬品の備蓄、治療・診断法の開発、防護設備資機材の準備、テロ対処マニュアルの構築、テロ対処訓練、重要施設での危険物モニタリング・セキュリティーチェック、感染症サーベイランスが必要である。テロ発生直後の事後対処としては、被害の最小化を目的として、現場に急行した初動措置隊による原因物質の現場検知、資料採取と専門機関への搬

送、専門機関での分析、被害者の救助及び緊急治療、初動捜査が必要となる。現場はその後除染され、被害者は治療を受け、被害は復旧する。事件発生後の事件処理においては、テロの再発抑止を目的として、テロリスト逮捕に至る捜査、事件鑑定、公判対応がなされる。テロの中でも、生物化学テロは、用いられるものが炭疽菌やサリン等、特殊な存在であり、それらに対する対処に高度な専門性を必要とするのを特徴としている。

われわれ薬学研究者が、生物化学テロの事前対応、事後処理、事件処理に対して、薬学の特殊知識、技術を活かして、いかに貢献し、安全・安心な社会の構築に導けるかが問われる。日頃からの薬学関連の研究を通して、生物化学テロ対処に取り組む今が旬な時期であろう。本シンポジウム「生物化学テロの危機管理にいかに関与するか」においては、科学警察研究所の瀬戸康雄室長と広島大学大学院医歯薬学総合研究科の太田茂教授がオーガナイザーとして企画し、薬学会会員及び関係者のうちで生物化学テロ対処に携わる方々に、最先端の研究成果と併せて、テロ対策の現状と方向性に関して紹介を頂いた。まず、オーガナイザーの瀬戸康雄室長が趣旨説明をし、引き続き国立医薬品食品衛生研究所安全情報部第三室の山本都室長からは「化学災害と毒性情報の収集」、広島大学大学院医歯薬学総合研究科生体機能分子動態学研究室の太田茂教授からは「危険物の生体内挙動」、広島大学大学院医歯薬学総合研究科法医学研究室の奈女良昭講師からは「救急医療現場での毒物簡易検査法」、警察庁科学警察研究所化学第四研究室の瀬戸康雄室長からは「化学

科学警察研究所 (〒277-0882 柏市柏の葉 6-3-1)  
e-mail: seto@nrips.go.jp

日本薬学会第126年会シンポジウム S38 序文

剤の分析法と現場検知法」，東北大学大学院医学系研究科感染制御・検査診断学分野の賀来満夫教授からは「生物剤の診断法」，東北大学大学院薬学研究科物性解析化学分野の安斉順一教授からは「危険物の最先端センシング技術：バイオセンサー」と題す

る講演を頂いた。最後に，質疑応答，総合討論，太田 茂教授からの総括で締めくくった。本誌上シンポジウムは，上記講演のなかから，4名の発表内容を総説としてまとめたものである。